

## 崇徳会研究・研修センター便り第 1 号「研究のすすめ」(2024/10/30)

社会医療法人崇徳会研究・研修センター長 稲井徳栄

本年 5 月から崇徳会研究・研修センターが設立されましたが、組織としては不十分な面もあり、皆様に十分認知された組織とは言えません。設立の目的は学会発表と論文投稿の促進を補助、援助することと、講演会を開催することです。

手始めに、崇徳会研究・研修センター便りを定期的に発行することにしました。第 1 号は、福沢諭吉の「学問のすすめ」に倣ってタイトルを「研究のすすめ」と銘打って自身の研究活動を回顧してみました。

### 「研究のすすめ」

自身の最後の研究発表(演者)は 2010 年 6 月の第 6 回日本司法精神医学会大会(東京大学安田講堂・山上会館)でした。発表内容は措置入院に関するものでした。昭和 40 年代に学生運動で騒がれた安田講堂の壇上に上がった時は感慨深いものがありました。

当院に来てからは、日本精神神経学会や新潟精神医学会の共同演者が数回あるのみです。学会に参加することもとても大切ですが、旅行でもあるわけです。沖縄では背丈が 2 メートルのブーゲンビリアに驚きましたし(新潟では 30-40 センチ)、列車から眺める鳥海山(秋田県と山形県の境)の雄大さに魅了されました。時間の許す限り、美術館巡りをしました。夜は全く自由時間です。野球場に足を伸ばしダルビッシュ投手の勇姿を見ましたし、念願のボサノバ歌手小野リサさんのコンサートにも行きました。そういう余録もありました。論文は何編か書きました。一番印象に残っている論文は精神科治療学 1990 年第 5 巻に掲載された「アルコール依存症の進行度について」です。約 1 年間かかりました。この論文は学位論文(医学博士の資格取得)でした。

あえて学会発表や論文執筆などしなくても良いのではないかという考え方もあるかと思えます。私の方から 2 点述べてみたいと思います。

1. 病院職員は皆一生懸命に医療に取り組んでいます。しかし後に何月何日にどんな仕事をしたかと言うことは残念ながら全く記憶に残りません。記憶に残っているのは非日常の学会参加などです。
2. 後年子供が私の論文を見つけ「頑張って書いたね」と言われたのが一番嬉しかったです。

研究のムード醸成に役立てばと思っています。今後は定期的に研究・研修センター便りを発行したいと思います。